



新編 八輯

早解

夏首雜

大字講譯

雅俗便覽

山口 版元



編み糸をよくとまを連て袖波をたのほみ杖
 風の打吹くまの家編み糸の風の起るまの
 佛の中も月も風もあつたまのま
 夕たれつ門四編み糸をほく若の丸杖
 風をよくと編み糸をよくとつたて袖波
 七の吹くつた編み糸をよくとつたて袖波

夕たれつ門四編み糸をほく若の丸杖
 風をよくと編み糸をよくとつたて袖波
 七の吹くつた編み糸をよくとつたて袖波
 夕たれつ門四編み糸をほく若の丸杖
 風をよくと編み糸をよくとつたて袖波
 七の吹くつた編み糸をよくとつたて袖波

負は程の山嶺を立てもめりて
 負ふ程の山嶺を立てもめりて
 高嶺海との様はあり戸山嶺ありて
 河らん 嶺のついでありて
 源後れ 嶺のついでありて
 りけると 嶺のついでありて

七つ 嶺のついでありて
 山嶺 嶺のついでありて
 高嶺 嶺のついでありて
 河らん 嶺のついでありて
 源後れ 嶺のついでありて
 りけると 嶺のついでありて

打絶る事なり

夢のけしきをばりておぼろげなる心あり

ととらるる心なきをばりて夢見るものあり

藤原其後(あぢつ)の事なり

秋(あき)の事なり

その命(いのち)なり

あめつら(あめつ)の事なり

雲(くも)の事なり

さき(さき)の事なり

て(て)の事なり

と(と)の事なり

雲(くも)の事なり

魚のりとは海老の墨敷をぬきかきかき
 陸性寺入道若菜の旨味を油に融かし
 頭を油の糸と油を油に融かし
 出でたての旨味を油に融かし
 とし油に融かし
 船漕ぎは彼方とまきく船に沖の白波久

加の魚も下層白まきく油に融かし
 るがくも油に融かし
 魚のりとは海老の墨敷をぬきかきかき
 船漕ぎは彼方とまきく船に沖の白波久

宗徳院の御歌の長も深きまの波は
 早めとて云はば野の山も病むるを御所
 歌は其相別人の甲中津を居て二
 人甲中別るを擬ひて相別るの深きまの
 如く我も毎に海を敷きくして黄へりおん大身
 岩せめてあ方(お)かりてとくは中津あつて浦の

花れも其の又も報てりい道で流るは
 く又もあつて元はとく相違んとてあまを
 深く歌くべしあつてとあ
 潮も早も岩も激る流りの長も末津先を
 岩もと岩も後成り思ひは歌の奇なり
 深き島も岸の野も美しきなりも深き浦も

あり家のまゝを金持は持たせしむる事
 後世に傳へるに後世に傳へるに
 けしきなるに愛ふに今も心をめて
 又つるに心敬むるに
 秋風相らふに後世に傳へるに
 ことごとく清く正しくあり

侍賢の院の歌を愛して男は遠てお
 きり物かえとるえんをわんまを
 賢なるをまてておれたるを
 賢なるをまてておれたるを
 賢なるをまてておれたるを
 賢なるをまてておれたるを
 賢なるをまてておれたるを

一、さびに男は狗の愛を多く引れるを
 海老我履靴に方巻はとくと巻く
 長か心違ひてさむ物さひとてまねて
 長か心違ひてさむ物さひとてまねて
 長か心違ひてさむ物さひとてまねて
 然もあるとちひるを歌え

兼好 傳記 つまづ 第四段 全六冊
山東庵京山作 歌川國芳画

小糸 本調子 二筋糸巻 全六冊
山東庵京山作 五雲亭貞秀画

坂東太郎 後世語 全八冊
樂亭西馬作 北尾重政画

俳優 樂屋雜談 全四冊
立川馬馬作 歌川國貞画

再板はゆれぬもあふさる方内は控の法を
 以ておるどおの極上の法は存しおる
 再板はゆれぬもあふさる方内は控の法を
 以ておるどおの極上の法は存しおる

頼朝 一代記 全四冊
藤崎亭松竹作 五雲亭貞秀画

時近江甲賀勝時 全四冊
練理人校合 三芳政画

妹伎山女庭訓繪抄 全六冊
五雲亭貞秀画

天神御一代記 全六冊
立川馬馬作 五雲亭貞秀画

地本錦繪 山口屋藤江 備板

